



うすい あきら

1983 年早稲田大学卒業、2001 年早稲田大学より博士号（商学）取得。新潟大学助教授、青山学院大学助教授、法政大学教授などを経て、2003 年より早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授。1959 年生まれ。



会計制度・市場・企業：日本の会計の景色を変える

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授 薄井 彰

会計情報が資本市場の価格形成に及ぼすメカニズムを長年にわたって研究してきた。複式簿記の計算技術を基礎とする会計制度のもとで、企業は利益、資本および配当といった集約情報を市場に開示する。計量経済学的手法を利用した実証研究は会計研究のメインストリームを形成している。しかしそれらの研究は、会計ルールと価格形成の関連および会計行動の因果関係の解明に有効であっても、会計制度がなぜ生まれ、どのように変容していったかという点に関しては十分ではない。そこで、本書では計量経済的アプローチと歴史的アプローチを同時に行い、会計制度の生成と変容を数量的に解析することとした。

本書は、歴史的資料から会計制度設計の権限を明らかにし、1950 年代から 2010 年代の大規模なパネルデータを利用して、企業のステークホルダーが会計制度を維持あるいは変更する事由、会計制度の変遷と資本市場の価格形成の関連性、会計ルールが企業行動に及ぼす経済的影響、経営者の利益操作などに関して、実証的証拠の体系化を図った。また会計制度創設時の一次資料からは、公明正大な財務諸表の開示、費用と収益の正確な期間対応、保守的な会計手続き、課税利益計算などの会計ルールが利害関係者の間で合意されていたことが明らかになった。本書の実証結果から、これらのルールが組み込まれた会計制度は市場の効率的な価格形成、経営者の規律付け、ステークホルダーの利害調整に貢献してきたといえよう。

会計学は市場取引を記録するための学問でもある。多くの研究者や実務家の方々の支えのもとで、戦後の会計制度と資本市場に関する実証的証拠を体系的に集成することができた。それだけでも学者冥利に尽きるうえに、この度の栄えある受賞は望外の喜びである。深く感謝するとともに会計学の研究を一層進めていきたい。日本の会計制度設計の現状は混沌としている。本書が規範的な制度研究に包括的な実証的証拠を提供すること、そして本書の歴史的かつ数量的な実証結果を契機として、新しい会計研究やエビデンス（科学的根拠）に基づく制度設計の実務が展開され、日本の会計の景色が変わることを願うばかりである。